

「避難所の衛生環境改善を」

能登半島地震では、全国から被災地に入った災害派遣医療チーム（DMAT）が延べ1028隊（1月29日時点）と、東日本大震災の約380隊を大きく上回っている。1月17日～22日に石川県穴水町に派遣され、避難所の支援に当たる各チームの調整を担った熊本大病院災害医療教育研究センター長の笠岡俊志医師（62）は、熊本地震の経験から災害関連死を防ぐための運動やケアの周知に努めた。課題として、避難所の衛生環境の改善を訴える。【1面参照】

「穴水町では、どのような業務に当たったのですか。」
「町の保健センターで、約40力所ある町内の避難所（約1600人）に対する医療支援の調整を担った。具体的には、他県から集まったDMATに各避難所の医療ニーズを収集してもらい、必要な対応を指示した。現場からの報告では、薬がなくて血圧や血糖値が上昇するなど持病が悪化するケースが目立った。適宜、薬の処方や救急搬送をした」
「熊本地震の経験が生かされた部分はありますか。」
「避難所支援の調整だけでなく、被災者が健康を保てるよう情報発信に努めた。熊本

地震でも問題になったエコノミークラス症候群の予防につながる運動や、発症しやすい状況かどうかを点検するチェックリスト、肺炎を防ぐための歯磨きの有用性を記したチラシを避難所で配ってもらった。今のところ、エコノミークラス症候群の発症は多くはないようだ」
「避難所で健康を維持していくために、トイレ・キッチン・ベッドに、入浴（バス）を加えた『TKB&B』の必要性も強調しています。」
「避難所の環境改善が、医療負荷の減少にもつながる。被災者からはシャワーを浴びたいという声も多かった。体



能登半島地震の被災地での活動について話す熊本大病院災害医療教育研究センター長の笠岡俊志医師＝1月30日、熊本市中央区（米本充宏）

熊本大病院災害医療教育研究センター長 笠岡医師

被災地でDMAT調整担う

重なる課題

随時掲載

熊本・能登地震

の清潔は健康維持にとって大事なことだ。自衛隊も風呂を展開してくれているが、足りていない状況。1～2週間、風呂に入っていない人も多かった」
「ただ、断水している状況なので開設は簡単ではない。私は七尾市に宿泊したが、こ

こも断水しており、風呂には入れなかった。支援者にとっても厳しい状況だった。どのような支援ができるのか、考えていかねばならない」
「DMATの活動は過去最大規模です。」
「全体の活動期間は1カ月以上に及んでいるが、依然として地元の医療に引き継げる状況ではない。熊本地震では発生から10日間で約400のDMATが活動したが、能登半島地震では既に1000を超えた。年々、隊員が養成されていることが大きい。関連死の防止に貢献していきたい」
（樋口琢郎）



避難所支援の調整に当たる熊本大病院災害医療教育研究センター長の笠岡俊志医師（左手前）＝石川県穴水町（笠岡氏提供）